東海地域における方言使用と印象

吉田健二　阿部まひる　粟田万美　稲垣剣豊　押野未帆　加藤康太
加藤優花　金子あつき　酒井大輝　田中優衣　冨永拓実　中野みゆき
南波茉奈　松本佳子　森田祥稔　和田優生

1. 目的

愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」では、毎年、言語調査を実施している。本稿では筆者たち（現3年生）が2017年9月に実施した調査の結果を中心に、これと関連した現4年生の卒業論文研究の成果も参照し、当地の地域言語の現状を報告する。

過去3回の調査（吉田・他 2015, 2016, 2017）や先行研究（山田 2004, 2007, 2017a, 2017b など）により、現在の東海地域にも、ある面では微妙な、またある面では顕著な方言差があることがあきらかになってきた。今回は現4年生の卒論計画の傾向を反映して、「このことばづかいをどうおもうか」など、方言にたいする認識・印象をたずねる項目がおおくなった。結果を総合し、東海方言話者が自分の地域や隣接する地域のことばをどのていど認識し、どのような印象をもっているか、ということの一端をあきらかにしたい。

2. 調査の概要

表1にあげる6市町の24名のかたがたに調査にご参加いただいた。調査地には、昨年度の調査地に隣接する、三重県菰野町、愛知県あま市・津島市、岐阜県羽島市・安八町および、過去未調査の三河地区の代表として、愛知県西尾市旧一色町をえらんだ。調査には各市長の教育委員会・社会教育課・町民センターなどに話者の紹介・調査日程や場所の提供などのお世話をいただいた。各地域20, 30, 40, 50歳代（以上）の1名ずつにたいする調査をおねがいした。以

下では、各話者を地域と年代をくみあわせた略称でよぶ。調査地は地理的には連続していないが、グロットグラムの表示形式にならい「地域×年齢」表によって結果をしめすことがある。そのばあい、表1とおなじく概略西から、三重〜岐阜〜愛知（尾張〜三河）の順とする。菰野町は30歳代がおらず、40歳代が二人だった。年齢のちいさい順に **komono40a**, **komono40b** とし、省スペースのため、地域 ×年齢の表では **komono40a** を30歳代、**komono40b** を40歳代のセルにおく。羽島市では60代のかた（**hashima60**）がいる。50歳代（以上）のセルにしめす。今回も依頼をした自治体や図書館・民俗資料館等の職員が話者をつとめてくださったケースがおおく、菰野をのぞく18名がそのようなかたがたである。生育地以外の居住歴を表1にしめしたが、いずれもごく幼少期または成人以降の数年にかぎられており、それぞれの調査地のことばを代表するかたがたとみなしてよいとかんがえる。

調査項目は(1)にしめすように複数の言語部門にわたる。調査は現地の会議室などで実施した。所要時間はお一人1時間以内。項目dのみ、録音をおこなった。

(1)　調査項目概要：（　）は本稿の節番号

a. 語彙項目（3.1）

b. 文法項目：文末詞（3.2.1）・命令表現（3.2.2）・待遇表現（3.2.3）

c. 方言認知項目：方言の認識（3.3.1）・方言の印象（3.3.2）・方言音声による方言推定と印象評定（3.3.3）

d. 音声項目：複合語アクセント / 句レベルのアクセント実現（3.4.1）・イントネーション（3.4.2）

e. 方言意識（3.5）

表１　話者の一覧：居住歴の居住地のあとの（　）の数字は居住年数

略称	生育地	生年	性別	生育地外の居住歴
komono20	三重県菰野町	1992	女	
komono40a	三重県菰野町	1971	女	
komono40b	三重県菰野町	1969	女	
komono50	三重県菰野町	1966	女	四日市（6）
anpachi20	岐阜県安八町	1989	女	
anpachi30	岐阜県安八町	1985	男	
anpachi40	岐阜県安八町	1976	男	京都（4）
anpachi50	岐阜県安八町	1959	男	
hashima20	岐阜県羽島市	1992	女	
hashima30	岐阜県羽島市	1983	女	大学時滋賀に通学（4）
hashima40	岐阜県羽島市	1977	男	京都（6）
hashima60	岐阜県羽島市	1953	女	
tsushima20	愛知県津島市	1991	男	京都（4）
tsushima30	愛知県津島市	1986	男	
tsushima40	愛知県津島市	1972	男	
tsushima50	愛知県津島市	1965	男	
ama20	愛知県あま市（甚目寺）	1990	男	清須（2）
ama30	愛知県あま市（美和）	1985	男	
ama40	愛知県あま市	1974	女	大治（3）、岡崎に通学（2）
ama50	愛知県あま市（甚目寺）	1962	女	名古屋（3）
isshiki20	愛知県西尾市（一色）	1991	女	
isshiki30	愛知県西尾市（一色）	1982	女	金沢（6）
isshiki40	愛知県西尾市（一色）	1976	女	名古屋（4）、大阪（2）
isshiki50	愛知県西尾市（一色）	1963	女	安城（3）

3.　結果

3.1　語彙項目（稲垣・加藤康・酒井・阿部・押野）

本節では語彙項目の調査結果の一部を報告する。「水溶き片栗粉を放置したときのように、粉が溶けきらず、底の方に溜まっている状態」について、静岡でコズム（富山 2007:27）、岐阜でもコズム・コゾム（山田 2017a:141）という方言形が報告されている。コズムは山梨・長野・愛知にも分布するとされており（富山 2007:27）、筆者の一人、愛知県西尾市生育の松本が地元でコゾムを耳にする。

しかし今回の調査では、コゾム・コズムを使うという人はひとりもいなかった。誘導質問もおこなったが、知っているという回答もない。かわりにえられた方言形はトゴルで、表２のとおり、今回の調査地の西端から東端までみられる。岐阜や愛知の方言集ではコゾムは「風呂になどにつかること」と記述されており（山田 2017a:141）、モノのようすではなくヒトの姿勢や行動を描写するのが典型なようである。この意味にそった質問文にしたらちがう結果がえられた可能性もあるが、「コゾムはこの意味でならつかう」というような教示も皆無だったので、現在の方言語彙としては、コゾムはいきおいがおとろえていると推測される。

表２　底のほうにたまる（沈殿）「トゴル」の使用　●

	菰野	安八	羽島	津島	あま	一色
20	●					●
30	●				●	●
40	●	●				
50-	●					

前年度につづいて、「信号が点滅するようすをあらわす擬態語」を調査した。結果は表３のとおり。( ) 内は、使用頻度がおちるという教示があったほうである。パカパカ、チカチカが共存するのが羽島以東、隣接する安八以西（南）はパカパカのみという地域差がみられる。前年度の結果（吉田・他 2017:226）と総合すると、菰野の南に接する四日市から、北に接するいなべ～海津～輪之内、さらに今回調査の安八までパカパカの優勢がつづき、安八の北に接する羽島でチカチカ優勢（あるいは互角）にきりかわる、ということになる。また、海津

表３　点滅のようすの擬態語　○ パカパカ　● チカチカ

	菰野	安八	羽島	津島	あま	一色
20	○	○	■	○	■	■
30	○	○	○	■	○	○ (■)
40	○	○	■	○	○	■
50-	○	○	■	○	○	■

の西に接する愛西市西端の旧八開・旧立田、さらに愛西市の西に接する津島～あまもパカパカがおおかった。愛知県尾張地方でもパカパカ優勢はつづくが、三河地方の西尾（一色）までのどこかでチカチカが優勢になる、というみとおしがえられる。近隣地域の調査により検証する必要がある。

「大雨などで全身が濡れてしまったようすをあらわす擬態語」も調査した。岐阜などの方言形ビタビタ（山田 2017a:332）の分布の確認が目的で、表 4 のとおり、共通語とおもわれるビショビショとの拮抗・併用がみられるものの、今回の調査地全域でビタビタの回答がある。40, 50 代にビショビショがおおい傾向がみとめられるが、理由は不明。方言擬態語ビタビタは若い世代までふくめて健在だとおもわれる。

表 4 「びしょぬれ」の擬態語 ○ ビショビショ ■ ビタビタ

	菰野	安八	羽島	津島	あま	一色
20	■	■	○(■)	■	○	○(■)
30	■		■	○	○(■)	(○)
40	○	■	○(●)	○	■	○
50-	○	○	■	○	○	○

『近畿言語地図』（岸江・他 2017:74）に綱引きの掛け声の分布がしめされており、そのうち、大阪～兵庫を中心に分布するオーエスの使用をしらべた。結果は表 5 のとおりで、「つかう」としたのは **tsushima20** のみ、安八以東に「きく」がみられる。近畿によりちかい地点でみられないのは不審で、隣接地域をしらべる必要がある。

表 5 綱引きの掛け声「オーエス」の使用 ○ つかう △ きく

	菰野	安八	羽島	津島	あま	一色
20				○	△	△
30						△
40						
50-			△	△	△	△

岐阜東濃地域などの若い世代から、「そうだよ」の意味で「ソーヤオ」がきかれる。「ヤオ」は「断定辞ヤ＋終助詞ヨ」の連鎖 [jajo] から 2 音節目の [j] が脱落したもの（融合にむかう変化か）とかんがえられる。この使用をたずねたところ、岐阜の 2 地点のみで「つかう」という回答があった（表 6）。前年度につづき、「親御さん」「保護者」がつかわれるフォーマルな場面でもちいられる「親さん」も調査した（表 7）。岐阜方言だという指摘（神田 2013）があるが、前回調査では岐阜県境に接する三重のいなべ、愛知の旧立田・旧八開でも使用の回答があった（吉田・他 2017:226）。今回の調査では、使用の回答は岐阜の 2 地点にかぎられる。ヤオとならび、岐阜および隣接する地域に分布がかぎられる方言現象のようである。調査を継続し、確認したい。

表 6 「そうだよ」の意味の「そうヤオ」の使用　○ つかう　△ きく

	菰野	羽島	安八	津島	あま	一色
20		○	○			
30		○				
40			○			
50-			○			

表 7 「親さん」の使用　○ つかう　△ きく

	菰野	羽島	安八	津島	あま	一色
20		○	○			
30		○	○		△	
40		○	○		△	
50-	△	○	○			

3.2　文法項目

3.2.1　文末詞「テ」「シ」（吉田）

標準的な日本語文法で接続助詞に分類される「シ」の、終助詞的な用法への拡張が指摘されている（日本語記述文法研究会 2008:293-294, 島本 2008, 栗原 2009, 舩木 2012）。例を (2) にあげる。

(2)「もういいし。。。矛盾してるし。気分屋すぎるし。もうまぢめに怒った。」（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」Yahoo! ブログ 2008 年）

このような「シ」の例は東海地域でも聞かれるが、岐阜県多治見市、可児市の小学生の自発発話には (3)(4) のような例も聞かれる。

(3)「なんやしこいつ」（なんだよこいつ）

(4)「なんやしこれ？」（なんだろうこれ？）

終助詞的「シ」は、大阪で明治期からの使用の報告があり（舩木 2012）、首都圏だけの現象ではないようだが（島本 2009）、(3)(4) の例は、接続助詞の用法に由来する「累加」「理由」などの含意（日本語記述文法研究会 2008:293-294, 栗原 2009:80）がない、疑問のモダリティにつく（栗原 2009:84）など、終助詞的「シ」について指摘されてきた特徴や制約から逸脱しており、終助詞の機能の理解・習得が不十分なことによる誤用かとうたがわれた。そこで、このような用法が存在するか、存在するとすれば東海地域のうちどこで、どの世代が使用するのかをさぐる調査を実施した。

先行研究の「シ」の記述（栗原 2008, 島本 2009）と、「シ」と隣接する意味・機能をもつ方言終助詞「テ」の記述（芝田 2008）を参照して 12 の調査文を作成、「シ」「テ」をふくむ発話それぞれの使用をたずねた。存在自体が不確定なので、「聞いたことがある」「たまにつかう」という消極的肯定は問わず、「つかう」「つかわない」のみとした。「シ」「テ」が疑問詞と共起する調査文は (5~8) の 4 つ、疑問詞と共起しない調査文は (9~12) をふくむ 8 つ。

(5)「なんやてこれ？」「なんやしこれ？」（独言的疑問）

(6)「なんで片付けんのやて」「なんで片付けんのやし」（理由を問う→叱責）

(7)「この花、おおいぬのふぐりっていうんだよ」「どんな花やて」「どんな花やし」（ヘンな（名前の）花だなあ、ほどの意味．呆れ・感嘆）

(8)「なんで最近こんなに寒いんやて」「なんで最近こんなに寒いんやし」（疑問→ボヤキ）

(9)「あ、こんなとこにあったし」「あ、こんなとこにあったて」（発見）

(10)「今やっとるて！」「今やっとるし！」（反発）

(11)「靴下左右ちがうて」「靴下左右ちがうし」（ツッコミ）

(12)（あの俳優見かけたんだって？にたいする応答）「そうなんやて！」「そうなんやし！」（強い感情の伝達）

結果、疑問詞のない文については、「テ」を文末においた発話を「つかう」としたのが約 34%（= 65/192）、「シ」が約 43%（= 83/192）だった。(12) のように、先行研究の記述から「シ」ではもちいられにくいと推測された調査文もあることをかんがえると、東海地方における浸透が確認できたとおもわれる。いっぽう、疑問詞と共起する文 (5-8) では、「テ」が約 44%（= 42/96）と、上記とおなじような使用率だったのにたいして、「シ」は約 6%（= 6/96）とはるかにひくい。「疑問詞～シ」を「つかう」としたのは 20 代の 3 名（**komono20**, **hashima20**, **ama20**）で、もっともつかうのは **hashima20**（4 例すべて使用）。「疑問詞～シ」が小学生以前の世代にも使用されるらしいことはうかがえたが、広範な採用・拡大にはいたらない、ごく一部の「誤用的な使用」である可能性ものこる。いっぽう、岐阜市生育・在住の現 4 年生辻は、周囲の「疑問詞～し」の使用をしっており、誤用という印象をもたない。このことを確認するため、岐阜を中心に質問紙による追加調査を実施した。この際、夏季調査から 3 例を削除し、5 例を追加した。愛知淑徳大学の 1 年生 24 名から愛知の若年世代のデータもえて、あわせて岐阜 60 名、愛知 38 名となった。詳細は辻（2017）にゆずり、ここでは県別の概略を報告する（表 8）。

表８　終助詞「シ・テ」をつかう発話の使用・不使用

疑問詞なし

40代以上 (23/20)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	32	21
yes	63	17

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	34	17
yes	11	2

30代 (7/5)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	3	13
yes	10	21

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	24	13
yes	4	1

20代以下 (30/23)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	11	69
yes	72	56

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	32	51
yes	18	31

疑問詞あり

40代以上 (23/20)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	50	0
yes	55	2

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	33	0
yes	3	0

30代 (7/5)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	5	0
yes	13	14

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	11	3
yes	2	0

20代以下 (30/23)

岐阜

	シ	
テ	no	yes
no	17	26
yes	58	45

愛知

	シ	
テ	no	yes
no	71	4
yes	26	8

表８は、終助詞「シ」の使用・不使用をヨコ（列）に、「テ」の使用・不使用をタテ（行）に表示したクロス集計表である。yes が「つかう」、no が「つかわない」、左２列が疑問詞なし、右２列が疑問詞あり。インフォーマントの年齢を 40 歳代以上、30 歳代、20 歳代以下に三分割し、タテにならべた。(23/30) などの数字はインフォーマント数（岐阜 / 愛知の順）。

まず、疑問詞なしのケースでは、(i)「テ」は岐阜がよりつかう、(ii)「シ」は両地域とも若い世代がよりつかうという傾向が確認できる。「テ」が岐阜方言と記述されていること（芝田 2008）、終助詞の「シ」が比較的あたらしい言語現象と記述されていること（島本 2008, 栗原 2009）と整合する結果である。いっぽう疑問詞ありのケースでは、「シ」を岐阜の 20 代では半数ちかく（71/146 例）が使用するとしたのにたいして、40 代以上では 2/107 例にとどまり、両者のあいだの 30 代が 4 割ほど使用するとこたえた（14/32 例）。いっぽう、愛知では 40 代以上では皆無（0/36 例）、30 代で 3/16 例（19%）、20 代以下でも 1 割強（12/109 例）の使用にとどまる。総合すると、(iii) 現在 30 代あたりの世代を境に、(iv)

とくに岐阜で勢力をつよめつつあることがうかがえる。岐阜で勢力がよりつよいことについては、終助詞「テ」の使用との関連の可能性がうたがわれる。岐阜方言の「テ」には「自らの考え・意見・認識と、聞き手の発話内容とのずれを明示する」（芝田 2008:49）など、終助詞「シ」とちかい意味機能があるが、疑問文・命令文などにももちいることができる（芝田 2008:48）からである。さらに広範囲の調査と検証が必要である。

3.2.2　命令表現（中野・南波）

前年度につづいて命令表現の調査を実施した。「自分の子・年齢の離れた目下の人物・同郷の友人・他地域の友人」の 4 種の聞き手にたいして、「はやくするように促す」ときの動詞「する」の命令形について、あらかじめ「しな」「しやー」の選択肢をあたえてたずねた。表 9 に結果をしめす。世代差ははっきりしないが、地域差と聞き手によるちがいがみとめられる。三重の菰野は、自分の子に対してはシナ、それ以外の聞き手にはシテをつかうという回答がおおく、シヤーは皆無だった。いっぽう、一色をのぞく愛知と岐阜はシナとシヤーがおおいが、聞き手によるつかいわけははっきりしない。他地域の友人が聞き手のときは「その他」がおおくなるが、「早くすれば」「早くしたら」「早くしてほしいな」など、ことなる待遇価値をもつとおもわれる表現の回答がふえる。三河の象徴的方言のひとつシリンは、**isshiki20** にのみ回答された。それ以外の一色のインフォーマントに使用回答がないのは、選択肢にくわえなかったためである可能性がある。

表９　命令表現　● シナ　○ シヤー　△ シテ　☆ シリン　＊ その他

(1) 聞き手＝自分の子

	菰野	羽島	安八	あま	津島	一色
20	●	○	●○	○	○	☆○
30	●	○	○	●○	○	○
40	●	●○	●○	○	●○	●
50-	●	○	○	○	＊	○

(2) 聞き手＝年齢の離れた目下の人物（後輩や部下）

	菰野	羽島	安八	あま	津島	一色
20	△	○	●○	○	○	☆
30	△	○	○	●○	●	○
40	●△	●○	○	＊	●○	●
50-	●△	○	●○	○	＊	△

(3) 聞き手＝同郷の友人（同い年）

	菰野	羽島	安八	あま	津島	一色
20	△	○	●○	○	○	☆
30	△	＊	○	●○	●	○
40	△	○	○	○	●○	●
50-	●△	○	●○	○	＊	△

(4) 聞き手＝他地域の友人（同い年）

	菰野	羽島	安八	あま	津島	一色
20	△＊	＊	●○	○	●	●
30	△	＊	○	●○	●	●
40	＊	○	○	○	●○	△
50-	△	＊	△	○	＊	△

つづけて「「しろ」を５としたばあい、「しな」「しやあ」はどのくらいの命令の強さを感じますか」とたずねた（１～５の５段階）。地域ごとの平均値を表10にしめす。すべての調査地でシナの値がたかく、シヤーより強い言い方と感じる傾向が一貫している。また、シヤーをつかわない菰野の話者が、愛知・岐阜とひじょうにちかい評価値をしめす。自身ではつかわないものの、近隣地域のひとびとから耳にすることで一定のなじみがあり、使用地域における表現価値をかなり正確に理解している、という可能性がかんがえられる。尾張地域の追加調査もふくめた詳細は後藤（2017）で報告しているので参照されたい。

表 10　命令表現の強さ（シロ＝５として．１～５）

	菰野	安八	羽島	津島	あま	一色
シナ	4	4.5	4	3.8	4.8	3.5
シヤー	2.3	2.5	3	2.3	2.5	2.5

3.2.3　待遇表現（森田・和田）

東海地域の動詞に後接する敬語的要素には、待遇価値や使用世代をことにする複数の形式が共存し、それらが拮抗する状況に地域差があるとされる（江端 1981）。このうち「あの方を知ってみえますか」などの敬語補助動詞 (テ) ミエルは、標準語におなじ語形の動詞があることもあり、現在もよくもちいられている（鷲見 2016:58, 大西 2016）。しかし、前年度調査では、20 歳代でつかうという回答がややすくなく、標準語の (テ) イラッシャルが優勢なようすがみられた（吉田・他 2017:215）。これがミエルの使用後退のきざしなのかどうかをさぐるため、伝統的な敬語補助動詞ゴザル、標準語イラッシャルとともに、印象をたずねる調査をおこなった。(13-15) の文をしめし、カタカナ部分について、「新しい～古い」「都会っぽい～田舎っぽい」「丁寧だ～くだけている」の評価語対の 5 段階評定をもとめた。「新しい・都会っぽい・丁寧だ」が 1、「古い・田舎・くだけている」が 5 である。全 24 名の平均値を図 1 にしめす。

(13)「どのようなことを考えてミエルか、まずお聞きしたいと思うのです。」

(14)「あの人は、昨日夜遅くまで仕事してゴザッタ？」

(15)「どのようなことを考えてイラッシャルか、まずお聞きしたいと思うのです。」

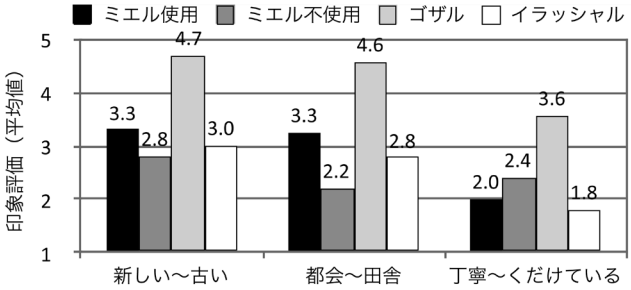


図 1　「ミエル」「ゴザル」「イラッシャル」の印象（全員の平均値）

それぞれの語の使用もたずねたが、ミエルは「つかう」(20/24 名) か「つかわない」(4/24 名) かにしたがって分割した平均値を、イラッシャルは全員の平均値を表示する。

伝統的なゴザルは古く、田舎っぽく、ややくだけている、標準語イラッシャルは新しさ、都会っぽさについては中程度だが、かなり丁寧な表現という印象である。これにたいしてミエルの印象は、使用するかどうかによってややことなる。使用するひとの印象は、イラッシャルとかなりちかい。新しさ、都会っぽさについてはニュートラルで、標準語のイラッシャルに匹敵するほど丁寧という印象である。いっぽう使用しないひとは、もうすこし新しく、都会的で、くだけているものの、やはり、ゴザルとはおおきくかけはなれた印象である。ミエルのイラッシャルとの印象評定のちかさは、この形式が方言的な意識をあまりもたれていないという従来の指摘をうらづける。ミエルはイラッシャルにちかい、ニュートラルで丁寧な表現として、今後もつかわれつづける可能性が示唆される。では、イラッシャルはミエルとまったくおなじ表現価値でつかわれているかというと、かならずしもそうはいえないようである。3.3.3 節で検討する。このほかの語もふくめ、独自のデータも加えた考察を所(2017)がおこなっているので参照されたい。

3.3 方言の認知・認識

3.3.1 方言の認識(吉田)

今回、方言的な要素をふくむ文を提示して、インフォーマントに「この部分は方言だろう」という要素を推測し、指摘していただく調査を実施した。提示した文は (15-18) の 4 つ。いずれも対話形式をふくむ。方言という指摘が予想される箇所に下線をほどこす。

(16)「課題出すのって放課後までやんね − 5 時間目の放課までやよ」

(17)「私、来週北海道行くじゃんね − 天気どうなん ? 」

(18)「私、来週北海道行くじゃんね − あっこで何するん ? 」

(19)「電車遅れとるから、ちょっと遅れるかも − どんなもんにつく ? 」

設定した方言的要素のほとんどが、おおくのインフォーマントに指摘された

が、「放課」だけ指摘がすくなかった。方言だという意識がひくい語であること、愛知に分布がかぎられること（山田 2007:26, 吉田・他 2017:222）が理由としてかんがえられる。また、方言と指摘があったときに、つづけて「ではどこの方言だと思うか」とたずねた。回答は曖昧で地域もまちまちだった（見当がつかないという答えもおおい）。一般のひとたちの方言認識がかなり漠然としたものであることがうかがわれるが、調査文の方言的要素は比較的あたらしく、また分布がかなり広域にわたるため、そもそも特定地域への帰属が推定しにくいという面もあったとおもわれる。くわしくは伊藤（2017）が報告している。

3.3.2　なじみのある / ない方言形式の印象（田中・松本）

本節ではやさしい命令のリン、ヤーの印象についての調査結果をのべる。「食べりん」などのリンは愛知県三河地方に分布する（江端 1981, 山田 2017b:193）。広告などにもとりあげられ、三河方言としての認知度はたかい。「帰りんさい」のように「ラ行五段動詞連用形＋なさい」の「な」が撥音化した形式の短縮形への平準化（leveling）に由来するとかんがえられ、一段系動詞のラ行五段化傾向がある地域で独立に発生しうる。前年度調査では三重北部～愛知西部の話者に「起きリン・食べリン・しリン」の 3 語の使用をたずねた（吉田・他 2017:216）。つかうという回答は皆無だったが、三重中部の鈴鹿・津などではさかんにもちいられる（赤塚 2016）。いっぽう「食べやー」などのヤーもやさしい命令をあらわす方言形で、愛知県尾張地方、岐阜県美濃地方にみられるが（江端 1981:19-21）、3.2.2 節でみたとおり三河地域でも使用があるようで（山田 2017b:190）、この調査場面での使用が適切かどうかは不明だが、形式じたいには一定の認知があるとかんがえられる。

今回はこのふたつの命令形式の使用ではなく印象を調査した。(20-22）の 3 つの場面 / 動詞のそれぞれにリンおよびヤーをもちいた計 6 種類の文を提示し「きつくない～きつい」「かわいい～かわいくない」「都会的～田舎っぽい」の 3 つの評価語対を提示し、5 段階評定をもとめた。いずれも 1 よりのちいさい数字がプラス評価である。

(20)（親しい友人のすすめ）「おいしいで食べてみりん / みやあ」

(21)（親や目上から）「はよ準備しりん / しやあ」

(22)（親が子どもに）「店員さんに聞いてこりん / こやあ」

三河地域はリン、それ以外の東海地域のインフォーマントはヤーになじみがあるのは当然だが、近隣地域の言い方にも一定のなじみがあると予想される。そこで、いずれの形式にもなじみがないとおもわれる神奈川大学の学生にもおなじ調査を実施した。愛知淑徳大学の学生への追加調査、4 年生杉浦の個人調査をあわせて三河 = 22 人、三河以外の東海地域 = 30 人、関東地域 = 35 人となった。「関東」としたインフォーマントの生育地は神奈川県が大多数で、一部他地域生育の人もいたが、東海地方はいない。リン、ヤーになじみがないひとびととかんがえる。結果を動詞 × 地域ごとに図 2 ～ 4 にしめす。

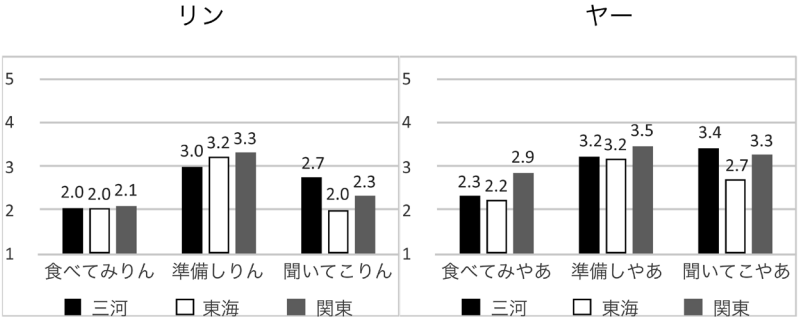


図 2　リン、ヤー 地域ごとの評定平均値：きつくない (1) ～きつい (5)

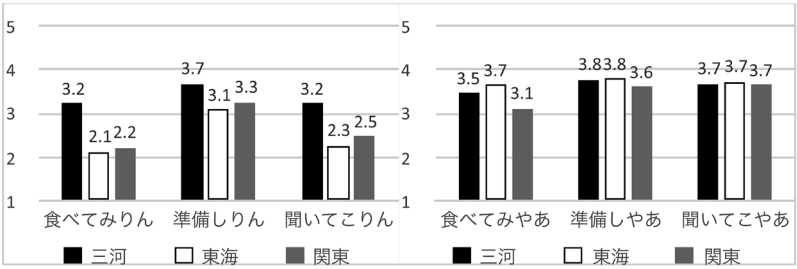


図 3　リン、ヤー 地域ごとの評定平均値：かわいい (1) ～かわいくない (5)

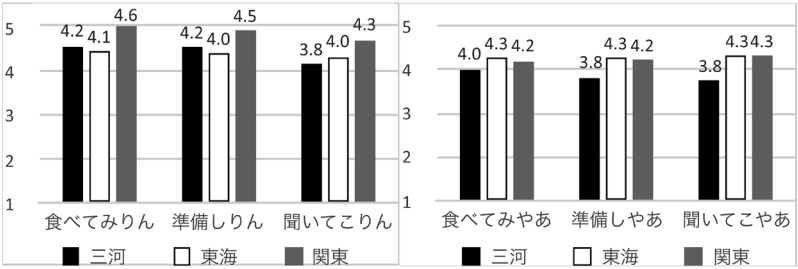


図４　リン、ヤー 地域ごとの評定平均値：都会的 (1) ～田舎っぽい (5)

「きつい」「かわいい」について、動詞によるちがいがみられる。「準備しリン」が、「食べてみリン・聞いてこリン」にくらべて「きつい」「かわいくない」という印象がつよいが、動詞そのものというより調査文の設定場面の影響であろう。親や目上の人から言い聞かされる状況よりも、親しい友人が食べ物をすすめる、親が子に言いきかせるという状況のほうがおだやかにきこえるということだとおもわれる。さらに、リンの「かわいい」（図３左）に地域差がみられる。三河より東海、関東のインフォーマントに「かわいい」印象がつよい。これは、リンをもちいた命令にたいする地域によるなじみのちがいに起因するとおもわれる。三河のインフォーマントのひとり **isshiki20** から「リンは（年配の）男性もふつうにつかう言い方なので、かわいいという感じはしない」という教示があった。地元の方言として、直接、さまざまな人物による発話を耳にすることで形成されることばの印象と、そのような経験（なじみ）をもたないひととの印象にはちがいがあるということをうらづける。いっぽう東海と関東の「かわいい」印象の評定はほぼおなじだった。いずれのグループも直接耳にする経験が（ほとんど）ないという点ではかわりがなく、調査文のイメージのみから「かわいい」という印象をよりつよくもったのだとおもわれる。またリンについては、関東で他の２グループより「田舎っぽい」という評価がたかい。「かわいい」の結果と総合すると、直接耳にしたことがないリンによる命令は、「田舎っぽいけれどかわいい」というイメージで受けとられた、ということになる。

いっぽう、ヤーについては地元とそれ以外との差はめだたない。リンとヤーのことばそのもののひびきのちがいにその理由があるかとおもわれるが、さらに検討する必要がある。詳細は杉浦（2017）が報告しているので参照されたい。

3.3.3　方言使用の印象（金子・加藤優）

ひとは状況におうじて、なんらかの効果を期待してことばを選択するが、方言も選択されうるレパートリーのひとつとかんがえることができる。今回の調査では、公職者の一例として「政治家」、一般人として「大学生」、対人ケア従事者として「医師」、以上三種類の人物が、東海地域における主流方言、周辺地域の非主流方言、標準語の三種類のことばづかいをしたときの印象をたずねる調査をおこなった。(23-25) の話し手と各発話を文字で提示し、「違和感・嫌悪感・親近感」の 3 つについて、それぞれ 5 段階評定をもとめた（1 が違和感・嫌悪感・親近感がたかい、5 がひくい）。

(23-a 政治家：標準語）　それはこの前の答弁です。

(23-b 政治家：主流方言）　それはこの前の答弁だがや。

(23-c 政治家：非主流方言）　それはこの前の方言なんやさ。

(24-a 大学生：標準語）　そうでしょう？

(24-b 大学生：主流方言）　そうづら？

(24-c 大学生：非主流方言）　そうだら？

(25-a 医師：標準語）　運動はしていらっしゃいますか？

(25-b 医師：主流方言）　運動はしておいでる？

(25-c) 医師：非主流方言）　運動はしてみえるの？

場面や発話内容・機能が人物によってことなるため、人物間の直接的な比較はむずかしい。また主流方言としてえらんだ方言項目も、政治家は（おもに）尾張に分布する方言、大学生は三河の方言などくいちがいがある。人物ごと、調査文ごとの分布地域が一定でないため、評定をあたえたひとたちの地域による比較もむずかしい。詳細は田中（2017）にゆずり、ここでは全体の傾向を報告する。

図 5 はヨコ軸に違和感、タテ軸に嫌悪感のいずれも 24 人全員の平均値をプロットした散布図である。x=y、つまり違和感＝嫌悪感になるところに補助線をくわえた。図 6 はヨコ軸がおなじく違和感、タテ軸は親近感である。補助線は同様に違和感＝親近感になるところにくわえた。

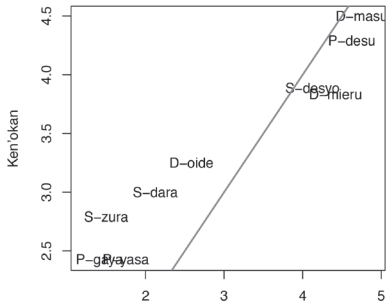


図５　違和感 × 嫌悪感

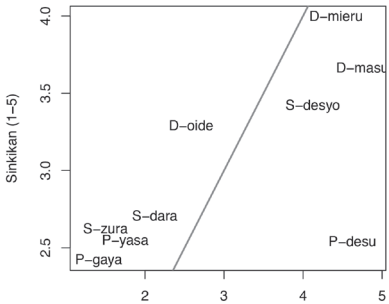


図６　違和感 × 親近感

略号：P 政治家、S 大学生、D 医者 / desu=23a, gaya=23b, yasa=23c; desho=24a, zura=24b, dara=24c; masu=25a, oide=25b, mieru=25c

図５ではデータが右肩上がりの直線上に分布しており、違和感と嫌悪感にはつよい相関がある（r=.97, p <.0001）。図の右上に位置するのは各人物が標準語を使ったケース（P-desu, S-desyo, D-masu）で、いっぽう左下に位置するのは各人物が方言を使ったケースだった（D-mieru は後述）。どの人物についても標準語をつかうほうが違和感・嫌悪感ともにちいさく、方言をつかうほうが違和感・嫌悪感ともにもたれる傾向にある、という結果である。ただし、左下の方言発話は x=y の補助線より上に位置する。とりあげた三人物の方言使用には違和感がかんじられるが、その違和感ほどには嫌悪感は感じられない、いっぽう共通語使用は違和感と嫌悪感がちょうどおなじていどである。

図６でもデータのおおくは右上がりの直線上に分布しており、違和感と親近感にも有意な相関がある（r=.63, p <.05）。また、政治家の標準語使用（P-desu）をのぞき、標準語使用が右上、方言使用が左下という位置も図５と共通する。調査した３タイプの人物の方言使用は違和感、嫌悪感がたかいだけでなく、親近感もかんじてもらいにくいと総括できる。ただし、図５と同様、左下の方言発話は x=y の補助線の上に位置し、共通語使用は下に位置する。方言使用はその違和感のつよさとくらべると、そこまで親近感はひくくないということである。いっぽう右上の医師・大学生の共通語（D-masu, S-desyo）の親近感は補助線の下に位置し、標準語使用が親近感をややさげることが確認できる。政治家の標準語使用（P-desu）ではこの効果がとくにおおきく、親近感は方言使用と

かわらないくらいひくい。この点で医師のミエルの方言発話（D-mieru）はほかの方言使用より違和感・嫌悪感ともにひくいだけでなく、親近感では標準語をうわまわる（図 6 右上）。この形式が、「気づかれない方言」のひとつとしてたんに非方言的なあつかいをうけるだけではなく（3.2.3 節参照）、地域方言が主流の東海地域で医師が患者にもちいることばとして、標準語より親近感のたかい伝達機能上の価値をもつ選択肢である可能性を示唆する。以上の推論には、違和感と嫌悪感の評定を等価とみなしてよい、という前提が必要であり、今後、調査方法を改善して検討する必要がある。

3.3.3　音声による方言の印象評定（吉田）

前年度から、音声をきかせてその印象をたずねる小実験を開始した（吉田・他 2017:227-229）。同一話者による方言バージョンと標準語バージョンを作成し、声質の印象などの影響を最小化するという matched-guise technique をもちいたもので、岐阜大垣方言と標準語との印象について、一定のなじみがある東海リスナーとなじみのすくない非東海リスナーとがややことなる評価をあたえる傾向があることが見いだされた（吉田・大橋 2017）。今回はこれにつづき、東海地域のより東に位置する三河方言と標準語バージョンによる印象評定実験を実施した。

提示した音声は、愛知県中部、三河地域に位置する安城市生育の現 4 年生、杉浦による、学生生活や卒業旅行についての 30 秒程度のひとり語りである。いずれのバージョンも杉浦が作成し、吉田がチェックして修正した。紙幅の都合で (26) に三河方言バージョンのみをしめす。

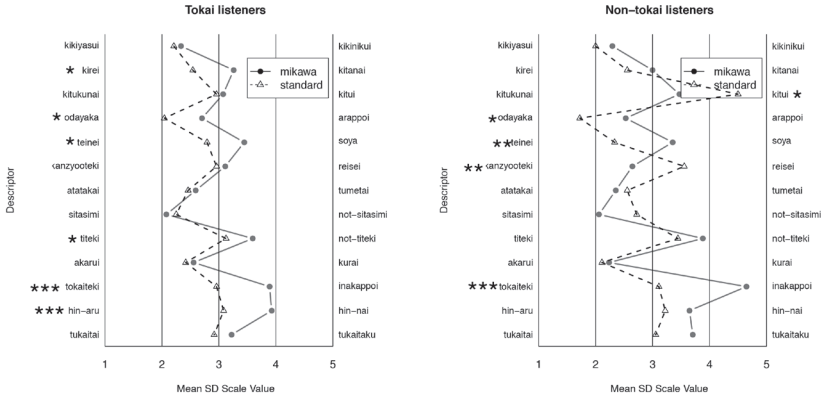
(26) 三河（安城）方言バージョンの文章（下線は三河方言に特徴的な要素）：

「うちはやっと就職活動が終わったじゃんね。就職活動が終わって、ゆっくりしたいんだけど、残りの学生生活は卒業旅行のために、アルバイトを増やさんとかんと思っとる。せっかくの卒業旅行だもんで、行ったことのない国に、行ってみたいことない？ だもんで、今はまだ友達と行き先を考えてるところじゃんね。でもその前に卒論もはよ終わらせんとかんじゃん。卒業できんかったら、意味ないもんでね。」

杉浦による録音を吉田が聴いて共通語としてのアクセントの誤りなどを

チェックした。調査ではお一人ずつ、ヘッドホンで提示し、質問紙で (27) の 13 対の評価語対を提示し、5 段階の評定を記入していただいた。いずれも、(27) の各評価語対で左側の、プラス評価の語を 1 とした。インフォーマントは、ランダムに三河（A）、標準語（B）のいずれかに割り当て、両音声の比較をふせいだ。表 1 の 24 人のうち 23 人（**ama40** には実施できず）にくわえて、愛知淑徳大学の学生 15 名をふくむ東海地域の 28 名にも実験を実施、さらに前回同様、東海地域の方言に直接のなじみがないひとたちの印象との比較のため、神奈川大学の 2, 3 年生 35 名（3.3.2 節の「関東」グループとおなじかたがた）にも実験を実施した。

(27) 音声の評価語：1 聞き取りやすい－聞き取りにくい / 2 きれい－きたない / 3 きつくない－きつい / 4 おだやかな－あらっぽい / 5 丁寧－粗野 / 6 感情的－冷静 / 7 温かい－冷たい / 8 親しみやすい－親しみにくい / 9 知的な－知的でない / 10 明るい－暗い / 11 都会的な－田舎っぽい / 12 品がある－品がない / 13 使いたい－使いたくない



東海リスナー（N=52）　　非東海リスナー（N=35）

図 7　音声によることばづかいの評価語の平均値（1 ～ 5）

● 三河バージョン △ 共通語バージョン　* p <.05, ** p <.01, *** p <.001

左側に * 等の注記 = 標準語がプラス評価、右側に注記 = 三河がプラス評価

図7にリスナーグループごとの、両音声にたいする評定平均値をしめす。前年度の大垣 vs. 標準語バージョンの結果と同様、リスナーグループによってことなる評価があたえられた項目がみられる。東海グループは「きれい、知的、品がある」について標準語バージョンを有意にたかく評価するが、非東海グループではこの差がちぢまり、有意でなくなる。「きつい」については東海グループで両バージョンに差がないが、非東海グループでは標準語バージョンが有意に「きつい」と評価された。評価がことなった項目は前年度とかならずしも一致しないが、「なじみのちがいによって音声の評価がことなりうる」ことが今回の結果からも示唆された。詳細は杉浦（2017）を参照されたい。

3.4　音声項目（吉田）

3.4.1　複合語アクセント / 句レベルのピッチ実現

前年度から複合語アクセントの調査を実施したところ、岐阜・愛知の話者から「新横浜」の [0 2]、人権作文の [0 2]（前半部と後半部のアクセント型を数字でしめす）のような、複合語の後部要素の初頭にピッチの谷をおく音調型がみられた。複合語の後部要素がながく（3モーラ以上）、その単独形のアクセントが中高型のばあい、後部要素のアクセント核位置が保存される「不完全複合」タイプのアクセント型になりやすい傾向がしられているが（中井 2008:159）、後部要素の初頭でもういちどピッチ下降・上昇がみられる東海方言の音声実現は、これよりさらに両要素の韻律上の独立性がたかいこと（一体化の不完全さ）を示唆している。吉田（2017）で、この語レベルの現象と、句レベルのピッチの谷のふかさと上昇のおくれとの関連の可能性を指摘したが、この問題をさらに検討するためには、よりおおくの複合語アクセントを調査し、同時にその話者の句レベルのピッチ実現についても検証する必要がある。

このねらいのもとに、「ヨーグルト」「ブルーベリーヨーグル」「物語」「偉人物語」など、16の単純語と、それを後部要素にもつ16の複合名詞のアクセントを調査した。結果は未整理だが、上記のような後部要素の初頭にピッチの谷がみられる発音はごくわずかで、「赤紫」「味噌おでん」などに [0 2] 型がきかれたが、ピッチの谷がなく前半部と後半部が韻律的に一体化しているとおもわれ

るものがほとんどだった。今回の調査語が適切でなかった可能性もあるが、現時点では上記の推察の強く支持するようなデータはえられていないということになる。

句レベルのピッチ実現についても、前年度までとおなじデザインの実験文をもちいてデータを得た。これも詳細な分析は実行していないが、吉田（2017）で報告した、東海方言に特徴的な「おそあがり」の音声実現をみせる話者は一部のみだった。現在の東海方言アクセントで、音声レベルでの共通語化も進行していることがうかがわれる結果だったといえる。なお、菰野の 4 話者からは、全員、式音調の対立のある、いわゆる京阪式アクセントタイプの音調実現がきかれた。前年までの 3 年、55 人の結果を総括した、「揖斐川以西の話者は全員、多少でも京阪式の音調を維持しており、その意味では東京式との境界はうごいていない」という結論（吉田・他 2017:230）を確認する結果だった。

3.4.2　wh 疑問文と連文節のイントネーション

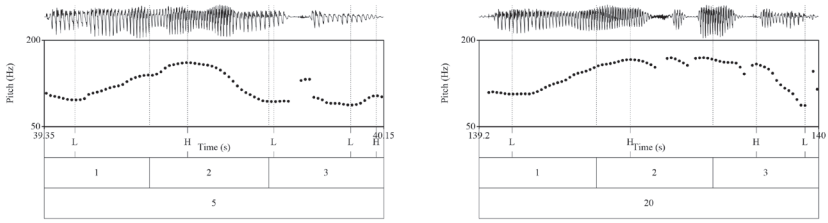
東海地域のイントネーションについては、ピッチの具体的なうごきに注目した体系的な記述はまだなされていないようである。イントネーション体系の全体像の把握は容易ではないが、今年度からこのためのデータ収集・分析を開始した。今年度は、疑問詞疑問文（以下、wh 疑問文）と、韻律上の単位が連続した領域（以下、連文節）のイントネーションを検討する。現 4 年生・橋本の内省と観察、吉田の観察により収集した発話例を中心に、久保（1989）による福岡市方言イントネーションの分析も参照して 20 の実験文を作成、24 人の話者のうち 18 人から録音データをえた。本節では、筆者たちが東海地域に特徴的とかんがえるイントネーションパターンをつかう傾向が顕著だった **tsushima20** の発話のピッチ動態を検討する。現時点ではピッチ動態上のどこが記述すべきイントネーションの特徴かということにかんする判断はさだまっていない。したがって分析は定性的、かつ暫定的なものである。

wh 疑問文からみる。(28)(29) は、wh 疑問詞に起伏型・平板型の語がつづく構造である。音声に付与した領域の境界をタテ線でしめす。

(28)「誰が | 長野 | いくの？」（図 8 左）

(29)「誰が | 大阪 | いくの？」（図 8 右）

図 8 をみると、発話初頭の「だれが」（領域 1）は上昇調で、つづく「長野」「大阪」内部（領域 2）までピッチ上昇が連続する。(28) の発話には文末によわいピッチ上昇があるが、(29) ではピッチ上昇がなくひくいままで発話が終了する。疑問を明示的に表す要素があれば文末の上昇イントネーションは必須ではないとかんがえられる。



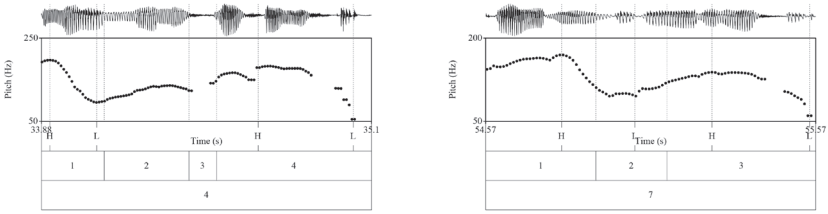
「だれが長野いくの？」　　「だれが | 大阪 | いくの？」

図 8　wh 疑問文のイントネーション（tsushima20）　上：音声波形、中：基本周波数、下：ピッチの特徴点 / 韻律上の領域 / 文番号

つぎに、wh 疑問詞が発話途中にある例をみる。(30)(31) は「何」「どこ」という疑問詞に先行する語がある発話である。

(30)「今、| 何 | して | らっしゃいました？」（図 9 左）

(31)「帰りに | どこ | 寄ります？」（図 9 右）



「いま何してらっしゃいました？」　　「帰りにどこ寄ります？」

図 9　wh 疑問文のイントネーション（疑問詞の位置が発話途中）

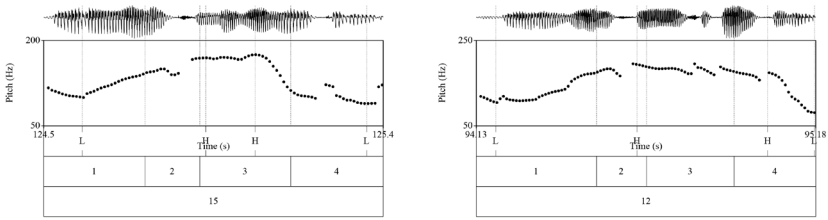
疑問詞（領域 2）初頭にピッチの谷があり、そこから単調に上昇、発話末の「ました」（領域 4）「ます」（領域 3）のアクセント核のあたりで下降する。疑問詞のまえに起伏式の語をおいたため、そのピッチ下降があり、疑問詞初頭のピッチの谷が疑問詞固有の特徴によって生じているかどうか判断がくだせないが、他の発話の観察から、疑問詞初頭でのピッチのひくめは必須であり、そこにおおきな韻律上のきれめがあるとかんがえている。また、いずれも文末の上昇はなく、wh 疑問文の文末は上昇イントネーションが必須でないという観察を補強する。

つぎに、疑問詞が連続した構造のイントネーションをみる。(32)(33) は疑問詞の連続に「長野」「大阪」が後続する発話である。

(32)「だれが | いつ | 長野 | いくの？」（図 10 左）

(33)「だれが | いつ | 大阪 | いくの？」（図 10 右）

いずれもひとつめの疑問詞「だれ」（領域 1）からピッチ上昇がはじまり、ふたつめの疑問詞「いつ」（領域 2）の区間でも上昇が継続する。ピッチ下降は (32) では「長野」（領域 3）のアクセント核の位置から、(32) では発話末で生ずる。(33) 発話末のピッチ下降は「大阪」（領域 3）「いく」（領域 4）が平板型で、ピッチ下降を生じさせる要因がないことから、疑問をマークするものだとかんがえられる。



「だれがいつ長野いくの？」　　「だれがいつ大阪いくの？」

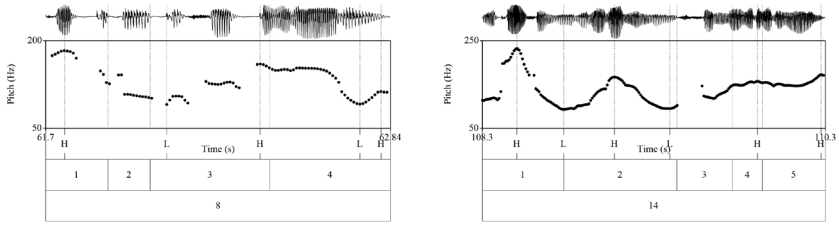
図 10　wh 疑問文のイントネーション（疑問詞の連続）

さいごに、連文節のイントネーションをみる。(34)(35) は述語動詞に「てもらう」および「ことない？」が後続した構造をもつ発話である。

(34)「ちょっと | これ | 手伝って | もらえる？」（図 11 左）

(35)「お父さんが | アメリカ人なら､| 自然に | おぼえる | ことない？」（図 11 右）

(34) は動詞「手伝って」（領域 3）の、(35) は動詞に先行する「自然に」（領域 3）の内部でピッチが上昇する。動詞はいずれも起伏型だが、そのアクセント核による下降が実現せず、後続する「もらえる」「ことない？」（領域 4）までピッチのたかさが維持される。



「ちょっとこれ手伝ってもらえる？」　「お父さんがアメリカ人なら自然におぼえることない？」

図 11　連文節のイントネーション

以上から、この話者のイントネーション実現上の「規則」を以下のようにまとめることができる。

(36) wh 疑問詞は上昇音調をもち、後続要素とひとつのピッチの山を形成する

(37) wh 疑問文の初頭のピッチの谷はかならず実現し、直前の領域との間に韻律上のきれめがおかれる

(38) wh 疑問詞が連続したばあい、ひとつめの疑問詞内での上昇だけが実現し、ピッチの山が後続要素も含めてひとつになる

(39) wh 疑問詞による上昇のあとの要素のアクセント核による下降は削除されない

(40) wh 疑問文では発話末の上昇音調は必須ではない

(41) 疑問マーカーのない疑問文では上昇調が必須である

(42) 発話末の下降調が疑問のモダリティをマークする機能をもつ

(43) 動詞に文法機能要素が後続した構造では、動詞のアクセントが実現せず、ピッチの山がひとつになる傾向がある

(36-37) は久保（1989:82-83）による福岡市方言イントネーションと共通した特徴にみえる。いっぽう (39-40) のため、福岡市方言とはことなり、発話末までた

かいピッチが連続することはなく、どこかでひくいピッチがあらわれる。また、(38) も、疑問詞それぞれの初頭でのピッチ上昇が必須と記述される福岡市方言とはことなる（久保 1989:80）。発話末イントネーションについては、(40-42) から、木部（2010）による日本語方言における類型のうち、松本方言が例にあげられている「相補タイプ」にちかいようである。疑問文以外については、(43) のように、動詞のアクセントによる下降の実現がおさえられ、ピッチの山がひとつになる傾向がみられる。この傾向は (34)(35) だけでなく「（座席を）つめてください」「（問題が）わからない」「（それ）食べてみたい」など、動詞に接辞が後続した形式でひろくみられる。この程度や範囲も今後の検討事項のひとつである。

以上は、典型とみられるひとりの話者の発話データにもとづく定式化であり、他の話者からは若干、あるいはおおきくことなるピッチ実現も聞かれた。今後は、自然なイントネーションを観察するための方法を開発するとともに、さまざまな構造の発話のピッチ実現を観察・分析する必要がある。今回の調査とおなじ実験文をもちい、岐阜方言話者のデータ分析した橋本（2017）では、上記に類似するものの細部がことなるイントネーションパターンを検討しているので、参照されたい。

3.5　方言に対する意識（粟田・冨永）

前年度から方言意識項目の調査を開始したが（吉田・他 2017:237-239）、本年度もおなじ項目をもちいた調査を実施した。ここでは前回のものとデータを統合し、そこでみられた傾向が再確認できるか検討する。**ama50** に調査もれがあったため、前年度の 27 名とあわせ、全体で 50 名分となる。調査したのは (44-48) の 5 項目。

(44) 自分のことばの構成比（愛知・岐阜・三重・標準語；計 100）
(45) 標準語との距離（1 とても遠い ～ 10 とても近い）
(46) 地元のことばが好きか（1 とても嫌い ～ 10 とても好き）
(47) 同郷の友人に地元方言をつかうか（1 まったく使わない ～ 10 とてもよく使う）
(48) 他地出身の友人に地元方言をつかうか（(47) とおなじ）

まず、各意識項目の県ごとの平均値をみる。図 12 左はヨコ軸にじぶんのこ

とばのうち地元方言の構成比を、タテ軸に方言が好きかどうかをプロットしたもの、図 12 右は、ヨコ軸に地元方言の構成比、タテ軸に標準語との距離の意識をプロットしたものである。いずれも、三重のインフォーマントが他の 2 県と明瞭にことなる傾向をしめす。すなわち、じぶんのことばが地元の方言で構成されているという意識がたかく、地元の方言が好きで、地元の方言は標準語との距離がとおい独自性をもっているという意識がつよい、ということである。この傾向は東（2017）の調査でもたしかめられており、三重の方言意識が東海地方のほかの二県とことなるものである可能性はたかい。

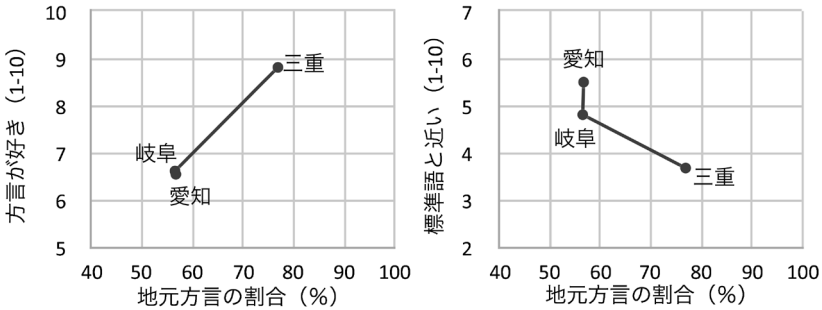


図 12　左：地元方言の構成比と方言の好悪との関係 / 右：地元方言の構成比と標準語との距離との関係（県別の平均値）

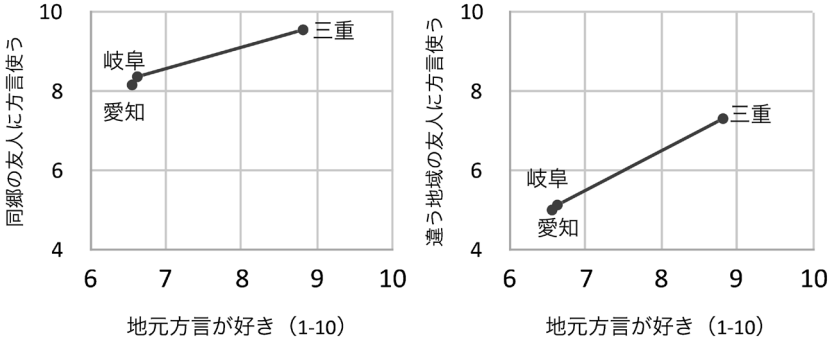


図 13　左：地元方言の好悪と地元出身の友人にたいする方言使用 / 右：地元方言の好悪と他地出身の友人にたいする方言使用（県別の平均値）

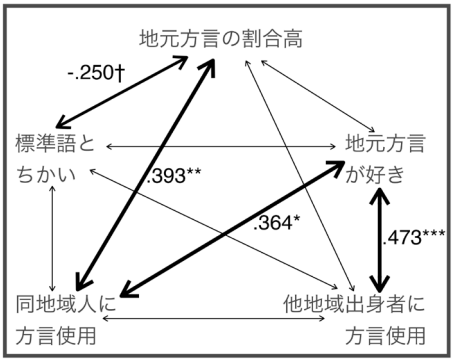
図 13 左は、ヨコ軸に地元方言の好悪、タテ軸に同郷の友人に方言を使う程度をプロットしたもの、図 13 右は、ヨコ軸に地元方言の好悪、タテ軸に他地域出身の友人に方言をつかう程度をプロットしたものである。どの県のグループも同郷の友人には地元方言をつかう傾向がたかいが、その傾向は三重のひとびとにより顕著である。また、他地出身の友人になると地元方言の使用をひかえる傾向があるが、三重グループはやや変化がちいさく、地元方言の使用を維持する傾向がつよい。

以上のように、三重の話者に地元方言にたいする好意がたかく、地元出身ではない人にも方言をつかってはなすという意識がたかい、という前回調査でみられた傾向が再確認された。この結果がえられた理由のひとつとして、三重の話者に各自治体の職員でないかたがおおいことによる可能性がかんがえられる（四日市羽津・富田、菰野の計 12 名 / 三重の自治体職員はいなべの 4 名 / 愛知・岐阜は 35 人全員が自治体､図書館などの職員）。とはいえ､各地の地元で生育し、地域をささえる職員として奉職するかたがたに、他の市民と比べて地元意識がひくいとする理由はみあたらない。現時点では、見出された傾向は実在するちがいを反映したものである可能性がたかいとかんがえている。このことと関連して興味ぶかいのが、地元方言を記録・紹介する活動が、過去、調査におうじていただいた市町のうち、とくに三重でさかんだとみえることである。亀山市（2014 年度調査）では Web 出版・公開した『亀山市史』に方言を紹介するページをもうけている（亀山市史篇さん委員会 2011）。四日市市富田地区（2016 年度調査）では、富田地区市民センターの Web ページに方言コーナーがある（富田地区ホームページ委員会 n.d.）。菰野町（2017 年度）では、同町社会福祉協議会が発行する広報『こもっ子 mama』に「知っとる！？菰野弁」という方言会話例の連載がある。

つぎに方言意識項目間の関連を検討する。(44-48) のすべての 2 項目間（44 は地元方言の割合）の、のこりの 3 項目の影響を統制した偏相関係数を算出し、有意性の検定もおこなった。図 14 では有意（傾向）のものを太線の矢印でむすび、偏相関係数を付した。相関は因果関係と同一視できないので、いずれの変数がいずれの変数の要因となっているか判断はむずかしいが、地元方言の割

合がたかいという意識が、標準語との距離がおおきいという印象や、同地域人に方言をつかうという意識にむすびつく傾向があること、地元方言への好意がたかいことが、同地域出身、異地域出身のいずれにも、地元方言をつかうという意識にむすびつくことがうかがえる。図 12 左でみたとおり、地元方言の割合と地元方言が好きという回答には有意な単相関（r=.405）があるが、他の変数の影響を統制した偏相関はゼロにちかくなる（r=.042）。この両者の相関は、同地域人に方言を使用する傾向を介したみかけの相関だとかんがえられる。以上は、前年度調査のもの（吉田・他 2017:238）とややことなる結果だが、データ数がほぼ倍になり、5 項目すべてのあいだの偏相関を検討した今回のほうがより信頼性がたかい。今後さらに隣接地域でのデータを補充し、東海地域全域の方言意識相互の関連の把握をこころみたい。

図 14　方言意識項目間の偏相関係数：
† p <.10 ; * p <.05 ; ** p <.01 ; *** p <.001



4. まとめ

東海地域は地理的・経済的にひとくくりに語られることもあるが、内部に濃淡さまざまな方言差が存在する。今回の調査結果もこれをうらづける。語彙・文法現象については、岐阜を中心とした言語現象（そうヤオ･親さん･終助詞テ）をみた。また、今回は三河地域の言語現象をとりあげたが（命令のリン、音声の評価）、地元のひとびとと、なじみのないひとびととのあいだに印象のちがいがみられた。また、三重のひとびとの愛知・岐阜とはことなる方言意識が再確認された。

日本の都道府県間の人口移動は 1973 年をピークに減少傾向がつづいている

（総務省統計局 2017:22）。名古屋圏のひとびとには地元をはなれることをきらう傾向がつよく（林 2016:213-220）、県間転入者数・転出者数は 2016 年度でいずれも 13 万人台と東京圏・大阪圏にくらべてかなりひくい（総務省統計局 2017:19）。名古屋圏には大都市圏としては流動性のひくい、安定した社会集団が成立しているとかんがえられ、これがこの地域の方言の独自性の維持、あるいは伝統的方言を基盤にしたあらたな特徴の発達をささえている可能性がかんがえられる。今回の調査結果についていえば、岐阜特有の方言現象が全国的に若い世代に拡大中の用法と融合したような表現形式（疑問詞～シ）の存在がみいだされた。音声現象については、イントネーションの予備的検討を開始した結果、他方言（福岡・松本）との共通点・相違点がみいだされた。また方言敬語 (テ) ミエルについて、標準語とはことなる表現価値が確認された。

今回も現 4 年生の卒業論文研究と共通項目による調査をいくつか実施し、本稿でも言及した。それら卒論の成果は「愛知淑徳大学方言研究室」Web で公開する予定なので、あわせてご覧いただきたい。ご提供いただいた貴重なデータを消化できなかった部分ものこった。今後も調査を継続し、データを統合してしめし、調査に協力くださったかたがたのご厚意への謝意に代えたい。

謝辞　話者の紹介、日程調整、調査会場の調整などについて、以下の諸機関のみなさまにお世話をいただきました：あま市美和歴史民俗資料館、安八町中央公民館、菰野町民センター、津島市企画政策課、西尾市岩瀬文庫、羽島市生涯学習課。また菰野町の話者のみなさん、岸江信介氏（徳島大学）、山田敏弘氏（岐阜大学）から文献のご提供をうけました。篤く御礼もうしあげます。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算による助成を受けています。

参考文献

赤塚奈津美（2016）「三重愛知岐阜における「ヤン」「ヘン」「ン」の使用度と、やさしい命令「リン」「リィ」の使用域」愛知淑徳大学卒業論文

東栞奈（2017）「方言意識と方言の採用について－三重と愛知の学生を対象に」愛知淑徳大学文学部卒業論文

伊藤萌香（2017）「方言の指摘率・使用率と方言意識について」愛知淑徳大学文学部卒業論文

江端義夫（1981）「方言敬語法体系の方言地理学的考察－愛知県地方域方言のばあい」『国文学攷』（広島大学）90:19-32.
大西恵梨（2016）「東海地方の方言敬語「テミエル」について－臨地調査と市議会議事録から－」愛知淑徳大学卒業論文
亀山市史篇さん推進委員（2011）『亀山市史』民俗篇（三）・方言 URL:http://kameyamarekihaku.jp/sisi/MinzokuHP/jirei/bunrui11/data11-3/index11_3.htm
神田卓郎（2013）「おまはん、ぜぇぁーしょはどこやったな？　岐阜よもやま話 No.01」『篝火　岐阜北法人会 Web 会報』No.132
岸江信介・清水勇吉・峪口有香子・塩川奈々美（2017）『近畿言語地図』徳島：徳島大学日本語学研究室
木部暢子（2010）「イントネーションの地域差―質問文のイントネーション」 小林隆・篠崎晃一 編『方言の発見』東京：ひつじ書房 pp.1-20.
久保智之（1989）「福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』156:71-82.
栗原さよ子（2009）「終助詞化した「し」」『学習院大学国語国文学会誌』52:73-87.
後藤温賀（2017）「命令表現の待遇意識―終助詞の流入と学校の方言使用意識」愛知淑徳大学文学部卒業論文
芝田拓哉（2008）「岐阜市方言の文末詞「テ」」『阪大社会言語学研究ノート』8:46-54.
島本明子（2008）「会話中にあらわれる文末詞シ」東京外国語大学・言語学専攻卒業論文
杉浦玄佳（2017）「話者の方言使用に対する印象評価と地域による影響－三河方言をもちいて」愛知淑徳大学文学部卒業論文
総務省統計局（2017）「住民基本台帳人口移動報告 平成 28 年（2016 年）結果（要約）」URL: http://www.stat.go.jp/data/idou/2016np/kihon/youyaku/index.htm
辻咲希（2017）「疑問詞につく終助詞「し」と岐阜方言の終助詞「て」の比較」愛知淑徳大学卒業論文
田中優奈（2017）「東海方言における言語ストラテジー－「方言コスプレ」と「ポライトネス理論」その印象と効果」愛知淑徳大学卒業論文
所恋実（2017）「方言敬語「ミエル」の衰退の可能性－語の印象と使用をとおして」愛知淑徳大学卒業論文
富田地区ホームページ委員会（n.d.）「ふるさと富田　富田の方言あれこれ」URL: https://tomida.org/hurusato/hougen.html
富山昭（2007）『えーらしぞーか：静岡県方言誌』静岡：静岡新聞社
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6 複文』東京：くろしお出版
橋本晋太郎（2017）「岐阜方言のイントネーション構成」愛知淑徳大学文学部卒業論文

林上（2016）『名古屋圏の都市地理学』名古屋：風媒社
舩木礼子（2015）「京都市方言の接続助詞・終助詞「シ」の用法」『論究日本文学』（立命館大学）96:11-28.
山田敏弘（2004）「岐阜県方言における否定表現」『岐阜大学教育学部研究報告』53(1):1-18.
山田敏弘（2007）「岐阜・愛知の若年層方言について 1 ―遊びのことば・学校のことば・オノマトペ ―」『岐阜大学教育学部研究報告』56(1):11-41.
山田敏弘（2008）「岐阜・愛知の若年層方言について 2 ～文法的な形式と社会的関係を表す表現」『岐阜大学教育学部研究報告』56(2):1-21.
山田敏弘（2017a）『改訂増補統一版 岐阜県方言辞典』ぎふ・ことばの研究ノート 17
山田敏弘（2017b）『改訂増補統一版 岐阜県方言辞典～岐阜県・愛知県方言地図』ぎふ・ことばの研究ノート 17-2
吉田健二（2017）「東海地域西部方言のアクセントにおける「おそあがり」の音声実現の特徴」『第 31 回日本音声学会全国大会予稿集』pp.43-48.
吉田健二・大橋里帆（2017）「音声による方言推定と評価　なじみによるちがい」『第 105 回日本方言研究会発表原稿集』pp.17-24.
吉田健二・他（2015）「三重県北・中部方言の現状：予備調査報告」『愛知淑徳大学国語国文』38:124-150.
吉田健二・他（2016）「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39:218-250.
吉田健二・他（2017）「三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』40:207-242.
鷲見秀樹（2016）「岐阜県郡上市及び周辺地域の方言における敬語表現―オイデル・ゴザル・ミエルの違い―」『上越教育大学国語研究』30:56-67.